

エフド物語 （士師記3章12-30節）解釈

— エフドによるエグロン殺害状況についての考察 —

An Interpretation of the Ehud Story in the Book of Judges
3:12-30: On the Circumstances of Eglon's Murder

越後屋 朗
Akira Echigoya

キーワード

ヘブライ語聖書、旧約聖書、士師記、エフド、エグロン、スカトロジカルな読み方、
ビット・ヒラニ式宮殿

KEY WORDS

Hebrew Bible, Old Testament, The Book of Judges, Ehud, Eglon, Scatological Reading,
Bit-Hilani Palace

要旨

本論は、エフド物語（士師記3:12-30）におけるエフドによるエグロン殺害状況について考察する。まず最初に、עֲלִית הַמִּקְרָה（20節）とחֲדָר הַמִּקְרָה（24節）を取り上げ、מִקְרָהが「梁」と関わりのあることを論じ、続いて、הַפְּרָשׁוּנָה（22節 a）とהַמְּסִדְרוֹנָה（23節 a）について、これまで提案されてきた解釈を検討する。最後に、Baruch Halpern によるスカトロジカルな解釈の妥当性をבַּעֲדוֹ（23節 b）と「鍵」の観点から見ていく。

SUMMARY

This article examines the murder of Eglon by Ehud in the Ehud Story in the Book of Judges 3:12-30. First, עֲלִית הַמִּקְרָה in v. 20 and חֲדָר הַמִּקְרָה in v. 24 are discussed, and a relationship between מִקְרָה and “beam” is proposed. Second, we look at some

interpretations of two *hapax legomena*: הַפְּרִשְׁרֹנָה in v. 22a and הַמְסַדְרֹרְנָה in v. 23a. Finally, Baruch Halpern's scatological interpretation is discussed as an example in terms of בְּעֶרְוֹ in v. 23b and “lock.”

エフド物語は、ヘブライ語聖書の士師記にある士師物語のうちのひとつである。神が立てた救助者であるエフドが策略を用いて、イスラエルを支配していたモアブの王エグロンを殺害し、それから80年にわたってイスラエルは平穏であった、という物語である。物語の内容は全体として理解しやすいが、ヘブライ語聖書中ここにしか現れない表現などがあり、細かなところまで正確に意味を捉えることはたいへん難しいテキストである。

本論では、エフドによるエグロン殺害状況についての検討を行う。それと共に、研究者によって提案されてきたスカトロジカルな読み方 (scatological reading) の妥当性を考察したい。まず、エグロン殺害状況と直接関係する箇所を『聖書 新共同訳』(日本聖書協会) から引用する。

19自ら (注：エフドのこと) はギルガルに近い偶像のあるところから引き返し、「王 (注：モアブの王エグロンのこと) よ、内密の話がございます」と言った。王が、「黙れ」と言うと、そばにいた従臣たちは皆席をはずした。20エフドは近づいたが、そのとき王は屋上にしつらえた涼しい部屋に座り、ただ一人になっていた。エフドが、「あなたへの神のお告げを持って来ました」と言うと、王は席から立ち上がった。21エフドは左手で右腰の剣を抜き、王の腹を刺した。22剣は刃からつかまでも刺さり、抜かずにおいたため脂肪が刃を閉じ込めてしまった。汚物が出てきていた。23エフドは廊下に出たが、屋上にしつらえた部屋の戸は閉じて錠を下ろしておいた。24彼が出て行った後、従臣たちが来て、屋上にしつらえた部屋の戸に錠がかかっているのを見、王は涼しいところで用を足しておられるのだと言い合った。25待てるだけ待ったが、屋上にしつらえた部屋の戸が開かないので、錠を取って開けて見ると、彼らの主君は床に倒れて死んでいた。

『新共同訳』によれば、エグロンの宮殿 (宮殿という表現は出てこないが、王のいる建物なので一応本論では宮殿とする) における殺害場所は「屋上にしつらえた (涼しい) 部屋」で、その戸には錠をかけることができ、しかも部屋にはトイレがあったことがわかる。まず最初に、殺害場所について詳しく見ていくことにする。

I. עֲלִיַּת הַמְּקָרָה (20節) と חֲדָר הַמְּקָרָה (24節)

20節の עֲלִיַּת הַמְּקָרָה は『新共同訳』で「屋上にしつらえた涼しい部屋」となっている。עֲלִיָּה (עֲלִיַּת の abs.) は23、24、25節で הַלְּחֹת (הֶלֶת の pl. cstr.) と結びついて現れ、『新共同訳』では「屋上にしつらえた部屋の戸」と訳されている。この4つ節では同じ部屋のことが言われ、最初に出てくる20節には הַמְּקָרָה という説明が加えられている。この הַמְּקָרָה は24節の חֲדָר הַמְּקָרָה にも使われている。『新共同訳』はこれを「涼しいところ」と訳している¹。עֲלִיָּה と חֲדָר (חֲדָר の abs.) (“dark room”)² の関係は物語の内容から明らかである。חֲדָר הַמְּקָרָה は עֲלִיַּת הַמְּקָרָה の中（奥）にあり、そこにトイレがあったと考えられる。

עֲלִיָּה は「屋上の部屋」³と一般に解されているが、必ずしも屋上に限定された部屋というわけではなく、階上の部屋 (“upper room, room in an upper storey”)⁴ という意味である。エグロンの宮殿は「なつめやしの町」 (= エリコ) (13節)⁵ にあることから、屋上にしつらえた部屋がはたして過ごしやすいのかという疑問が生ずる。Tom A. Jull は、死海周辺の年平均気温は22℃で、夏は50℃以上にもなり、5月から10月までの日中の気温は一貫して30℃以上、冬の晴れ渡った日でさえ35℃に近づくことがあると指摘している⁶。ただし、池田裕氏は「パレスチナの多くの家屋は今でも屋上が平らで、夏の蒸し暑い夜などはそこで寝たりする。エフドが戻ってきたときはたぶん夕方、モアブの王も側近たちもここにいたらしい」と述べている⁷。もちろん、ここでの夕方という指摘はあくまで推測の域を出るものではない。

次に、עֲלִיַּת הַמְּקָרָה (20節) と חֲדָר הַמְּקָרָה (24節) に共通して使われている הַמְּקָרָה を取り上げる。一般に מְּקָרָה の語根は קָרָה (hifil: “to keep cool”)⁸ と考えられている。しかし、ここで注意を引くのは、「涼しい」といった意味が、עֲלִיָּה と חֲדָר の両方に結び付けられていることである。両方の単語の後に、定冠詞の付いた מְּקָרָה が続いている。ここで עֲלִיַּת הַמְּקָרָה と חֲדָר הַמְּקָרָה を部屋の名前として理解するなら、「涼しい」といった意味が עֲלִיָּה だけでなく、עֲלִיָּה の中（奥）にある חֲדָר にも付いていることに注意すべきである。そもそも、מְּקָרָה の語根は קָרָה なのだろうか。

Lawrence E. Stager は、מְּקָרָה を語根 קָרָה (piel: “to construct from wood, build with beams”)⁹ の piel ptcp. である מְּקָרָה と読み替える（子音は変化せず）¹⁰。מְּקָרָה はコヘレトの言葉の10章18節で使われ、意味は“beams”である¹¹。Stager によれば、מְּקָרָה は上階部分の床や天井に用いられた木製の梁を意味している¹²。また、関連する表現である קוּרָה (“timberwork, beam”)¹³ は、創世記19章8節、雅歌1章17節、歴代誌下3章7節、列王記下6章2、5節に出てくる。同様に、Baruch Halpern も梁と結びつけて考え、詩編104編3節に言及している¹⁴。そこでの עֲלִיַּת הַמְּקָרָה בְּמִים (『新共同訳』で

は「天上の宮の梁を水の中にわたされた」)には עֲלִיָּהּ も使われている。以上から、עֲלִיָּהּ と חֲדָר だけではどの部屋を指し示しているのか分からないことから、部屋がどこに位置するものかを示すため、מִקְרָה が用いられ、部屋の名前となったと考えることが可能である。

さて、エグロンの宮殿を考察する上で参考となるのがビト・ヒラニ式宮殿である。ビト・ヒラニ式宮殿は紀元前8世紀初期、ソロモンの時代の少なくとも半世紀後に初めてシリアに現れたもので¹⁵、いわゆる士師記の時代よりも後であるが、宮殿の機能が時代によって大きく変わるとは思われないので、参考にする意味は十分あると思われる。この様式の特徴は、柱のあるポーチとそれにつながる大きく細長い広間（王座の間）である¹⁶。例えば、メギドにおける第 IVB-VA 層の6000番宮殿などが挙げられる（同じ層の1723番宮殿もビト・ヒラニ式宮殿の変形と見なされている）¹⁷。

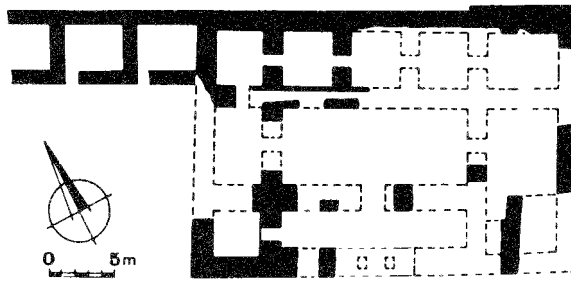


図1 前10世紀のメギドの6000番宮殿の復元平面図¹⁸

エグロンの宮殿にビト・ヒラニ式宮殿の特徴を重ね合わせると、次のような推測が可能である。エグロンは最初、柱のあるポーチから広間（王座の間）に入り、貢ぎ物を納め、再びやってきた時には、エフド王エグロンは広間にはおらず、חֲדָר הַמִּקְרָה が中（奥）にあるעֲלִיָּהּ הַמִּקְרָה に1人でいた。エフドは階段を上り、עֲלִיָּהּ הַמִּקְרָה に入り、エグロンを殺害し、עֲלִיָּהּ הַמִּקְרָה の戸に錠をかけ、広間を通りポーチから外へ出たと。עֲלִיָּהּ הַמִּקְרָה と広間とのつながり具合がはっきりしないが、広間にはעֲלִיָּהּ הַמִּקְרָה につながる階段があったと推測できる。

מִקְרָה の語根を קרה とする Stager の提案は大いに説得力があるが、ここではさらに、Jull による解釈も紹介しておきたい。彼も מִקְרָה の語根を קרה とするが（ただし、qal: “to meet, encounter, happen to” という意味での）¹⁹、その意味は「梁」とは関係なく、排尿・排便の場所と考える²⁰。その根拠として、申命記23章11節のמִקְרָה לַלַּיְלָה（「夜に起こった思いがけないこと」）に言及している。これは『新共同訳』で「夜、夢精」とあるように、一般的に男性の夢精と理解されている。申命記23

章11-12節の内容はレビ記15章16節と次のように大体合致している。

11夜、夢精によって汚れた者は、陣営の外に出て行き、中に入らず、12夕方になって水で体を洗い、日没に陣営に戻ることができる。

（申命記23章11-12節）（『新共同訳』）

もし人に、精の漏出があったならば、全身を水に浸して洗う。その人は夕方まで汚れている。（レビ記15章16節）（『新共同訳』）

しかし Jull は、レビ記15章16節には מִקְרָה לְיָלָה ではなく、 שִׁכְבַת־זָרַע が使われていることを指摘し、前者には夢精だけではなく、他の意味も含まれているとする。実際、申命記23章11-12節には以下のような箇所が続いている。

13陣営の外に一つの場所を設け、用を足すときは、そこに行きなさい。14武器のほかに杭を用意し、外でかがむときには、それで穴を掘り、再びそれで排泄物を覆いなさい。15あなたの神、主はあなたを救い、敵をあなたに渡すために、陣営の中を歩まれる。陣営は聖なるものである。主があなたの中に何か恥ずべきものを御覧になって、あなたから離れ去ることのないようにしなさい。（『新共同訳』）

Jull によれば、 מִקְרָה の文字通りの意味は “place of happening” であり、これは排便と排尿の場所、すなわち、トイレの婉曲的表現である。 $\text{עֲלִיַת הַמִּקְרָה}$ と חֲדַר הַמִּקְרָה はそれぞれ、“the upper room of happening” と “the chamber of happening” という意味であると主張する²¹。

Jull の解釈はひじょうにユニークなものであるが、彼の主張には大きな問題がある。彼は $\text{עֲלִיַת הַמִּקְרָה}$ と חֲדַר הַמִּקְרָה が部屋の機能、すなわちトイレという機能によって名付けられたとした²²。この場合、 חֲדַר にトイレという機能を意味する מִקְרָה が付いたことは理解できるが、 חֲדַר を中（奥）に持つ עֲלִיַת にも מִקְרָה が付くのはおかしい²³。Jull は、彼の論文の副題に “A Scatological Reading” とあるように、 $\text{עֲלִיַת הַמִּקְרָה}$ と חֲדַר הַמִּקְרָה をスカトロジカルに解釈している。このスカトロジカルな読み方については後で再び取り上げることにする（だからこそ、ここで Jull の説を紹介したわけである）。

II. 22-23節における *hapax logomena*

エフドによるエグロン殺害の状況を考察する上で、ひじょうに重要だと考えられる表現が2つある。それらはヘブライ語聖書中1度しか出てこず (*hapax legomenon* と呼ばれる)、意味が確定されていない **הַפְּרָשָׁנָה** (22節 b) と **הַמְסִדְרוֹנָה** (23節 a) である²⁴。これまで提案されてきた解釈を紹介しながら、それらの意味について検討してみたい。

(1) **הַפְּרָשָׁנָה** (22節 b)

הַפְּרָשָׁנָה を男性形名詞 **פְּרָשׁ** (「胃腸内にある物、糞、汚物」)²⁵ と関係させる解釈がある²⁶。例えば、NRSV は22節 b (**וַיֵּצֵא הַפְּרָשָׁנָה**) を “and the dirt came out” と表現し²⁷、『新共同訳』も「汚物が出てきていた」としている。こうした理解はアラム語タルグムとウルガタ訳によっても支持されている²⁸。

この解釈に対する隠れた根拠 (主要な根拠?) は、王エグロンが用を足しているとの従臣たちの発言 (24節 b) にあるのかもしれない。Yehezkel Kaufmann はこのことを指摘し、従臣たちは臭いに気づき、王が用を足すため戸に錠をかけたと思ったのであるとしている²⁹。臭いを24節 b の「王は涼しいところで用を足しておられるのだと言い合った」(『新共同訳』) という従臣たちの推測の根拠と考えることも可能だが、24節 a では「屋上にしつらえた部屋の戸に錠がかかっているのを見」(『新共同訳』) たことが根拠としてははっきりと示されており、22節 b が従臣たちの推測の根拠に必ずしも必要なわけではない。錠がかかっていることで用を足していることが自然に前提とされているのである。Kaufmann が指摘するように、従臣たちが臭いで王が用を足していると気づいたとするなら、王が用を足すとき、その臭いが戸の外まで流れるのはいつものことであったということになる。そうしたことが当たり前の状態としてあったなら、22節 b は24節での従臣の推測の根拠となるが、果たしてそうであろうか。我々はエグロンが殺害された宮殿の建築構造を知らないのだからこれについて結論を下すことはできない。もっとも知らないからこそ (考察できないゆえに)、Kaufmann のような見解が出てくるのである。22節 b の **הַפְּרָשָׁנָה** を「糞、汚物」と解釈する場合、それを24節と結びつけるよりは、むしろモアブ王エグロンへの嘲笑として見るべきだろう。エグロンは殺された上に、汚物まで出してしまったのである。王としての権威の失墜である。

「糞、汚物」とする解釈では、**הַפְּרָשָׁנָה** が動詞 **וַיֵּצֵא** の主語と理解されている。しかし、**הַפְּרָשָׁנָה** が主語だとすると、語尾の **ה** は女性形と理解され、動詞の男性単数形と一致しない³⁰。さらに、**הַפְּרָשָׁנָה** の **נָה** についても説明しにくい。ただし、

הַפְּרָשָׁהּ に本文損傷を見るなら、こうした批判は決定的なものではない。なぜなら、הַפְּרָשָׁהּ が22節 b と以下のように並行関係にある23節 a の הַמְסִדְרֹנָה の影響を受けたとも考えられるからである。

(22節 b) הַפְּרָשָׁהּ וַיֵּצֵא

(23節 a) הַמְסִדְרֹנָה וַיֵּצֵא אֶת־

22節 b の וַיֵּצֵא の主語の可能性として、22節 a に出てくる男性単数形の名詞は נֶבֶךְ (「柄」)、לֶהֶב (「刃」)、חֶלֶב (「脂肪」) である。ちなみに、חֶרֶב (「剣」) は女性形である。22節 a は、「刃の後に、柄も入り、脂肪が刃を閉じ込めた。エフドが剣を彼の腹から抜かなかったからである」(『新共同訳』) と訳される。抜かないことにより、腹に閉じ込められた状態になっている刃あるいは柄が、22節 b で出てきたとは考えにくい。ただし、刃がエグロンの背中の方に出た、とする解釈もあるようである³¹。この場合、剣がエグロンの腹を貫通していたということになる。また、脂肪が出てきた、とも読めるが、問題となるのは結局どこに出てきたのか、すなわち、הַפְּרָשָׁהּ が何を意味するかである。

次に、הַפְּרָשָׁהּ を פְּרָשָׁדוֹן に定冠詞の ה と「方向の ה (ה locale) が付いたものと理解し、פְּרָשָׁדוֹן をアッカド語の *parašdinnu* (「穴」) と関係させる解釈がある³²。ここで פְּרָשָׁדוֹן が建物に関係する用語だとすると、動詞 וַיֵּצֵא の主語 (3人称男性単数) はエフドと理解できる。この解釈に沿った訳として次のようなものが挙げられる。

「エフドは小窓から外に出て」(フランシスコ会聖書研究所訳)

「彼は [屋上の] 窓穴へ出た」(鈴木佳秀訳)

「エフドは窓から出て」(『新改訳聖書 改訂第三版』)

また、M. L. Barré は פְּרָשָׁדוֹן をアッカド語の *parašdinnu* (「穴」) と関係させるのではなく³³、アッカド語の動詞 *napsaršudu* (語根 *pršd*) (「外に出る」) と結び付ける³⁴。彼によれば、פְּרָשָׁדוֹן は語根 *pršd* に -on が付いた名詞形として考えられる³⁵。さらに、アッカド語の多くのテキストで、この動詞は、ヘブライ語の יָצָא (22節 b の וַיֵּצֵא の語根) に当たる (*w)asú* とともに使われ、それらのテキストでの意味から³⁶、Barré は *pršdn* の意味として、(1)脱出口 (逃げ口) という意味での、人が逃げる際に通る場所、(2) (体から) 流出する (漏れる) もの、すなわち、排出 (排泄) 物、(3) (体から) 何か流出する (漏れる) 際に通る場所、すなわち、肛門の可能性を指摘している。結局、彼は פְּרָשָׁדוֹן を וַיֵּצֵא の主語と理解し、22節 b について次のような英訳を提

案している。

(as a result) the/his excrement came out (of the wound)³⁷

結果として、ヘブライ語男性形名詞 פֶּרֶשׁ と関係させた解釈に近いものとなっている。また、脱出口(逃げ口)とした場合、前述のフランシスコ会聖書研究所訳や鈴木訳のような解釈も可能となってくる。ただし、23節 a で וַיֵּצֵא の主語として「エフド」が明示されていることは、22節 b における主語とは違うことを意味し、エフドの脱出行為それ自体の描写は22節 b ではなく、23節 a から始まると、Barré は主張している³⁸。この指摘は重要である。しかし、22節 b の意味が不明となった際に、ひとつの解釈として、主語を明示した23節 a が加えられたとも考えることができる³⁹。ちなみに Barré は、הַפְּרִשְׁוֹנָה の語頭の ה と語末の ה に関して、本来は מַפְּרִשְׁוֹן に定冠詞の ה がついていたか、あるいは מַפְּרִשְׁוֹן に3人称男性単数の接尾辞の古形がついていたと理解し、それに23節 a の הַמְסִדְרוֹנָה が影響を与え、הַפְּרִשְׁוֹן に「方向の ה」(ה locale) が加えられたか、あるいは מַפְּרִשְׁוֹנָה に定冠詞の ה が加えられたと考える⁴⁰。以上のように、הַפְּרִשְׁוֹנָה の意味を確定することは困難である。次に、23節 a に出てくる *hapax legomenon* である הַמְסִדְרוֹנָה の検討に移りたい。

(2) הַמְסִדְרוֹנָה (23節 a)

23節 a では22節 b と同じく、動詞 וַיֵּצֵא が使われているが、主語として「エフド」が明示されているので(「エフドは……へ出た」)、הַמְסִדְרוֹנָה は מַסְדְרוֹן に定冠詞の ה と「方向の ה」(ה locale) がついたものと理解される。מַסְדְרוֹן は、70人訳では προστάς となっており、一般に סֶדֶר (「秩序」⁴¹、語根は סָדַר [שָׁדַר]) と結びつけられ、「ポーチ」や「柱廊」と解釈されている(列王記上6章9節、列王記下11章8節、15節、歴代誌下23章14節参照)⁴²。

エフドは廊下に出たが(『新共同訳』)

(エフドは……) 廊下に出ると(フランシスコ会聖書研究所訳)

そこからエフドは回廊に出たが(鈴木訳)

廊下へ出て(『新改訳 聖書 改訂第3版』)

Then Ehud went out into the vestibule (NRSV)

こうした訳に対して、Baruch Halpern は新しい解釈を提案している。彼は מַסְדְרוֹן をヘブライ語、アラム語、アラビア語の語根 *sadira* (“to be blinded, puzzled”) と関

係させ、「隠された場所」といった意味に解する⁴³。そして彼は、エフドが出ていった「隠された場所」をエグロンがいた部屋（Halpern によれば、梁にしつらえた部屋）のトイレと結びつける。つまり、エフドはエグロンを殺害した後、トイレ（の穴）から階下の「隠された場所」へと出て、逃げたということになる。Halpern によれば、こうした表現は、24節に出てくる「用を足す」（『新共同訳』）（直訳では「足をおおい隠す」）と同じ婉曲的な表現である⁴⁴。

24節で、モアブ王エグロンが用を足していることが記され、22節 b において「汚物が出てきていた」（『新共同訳』）といった解釈がなされ、さらに Halpern は23節 a から、エフドがびっくりするような場所を通して脱出したことを提案しているのである。こうしたスカトロジカルな読み方に加わるのが（Halpern の読みの延長線上にあるのが）、すでに紹介した **עֲלִית הַמִּקְרָה**（20節）と **הַיָּרֵר הַמִּקְרָה**（24節）についての Jull の解釈である。スカトロジカルな解釈によって、エフド物語は単なる英雄物語からひじょうにユーモラスな物語へと変化するが、はたして Halpern の解釈は妥当なものと言えるのだろうか。

Ⅲ. スカトロジカルな解釈の妥当性

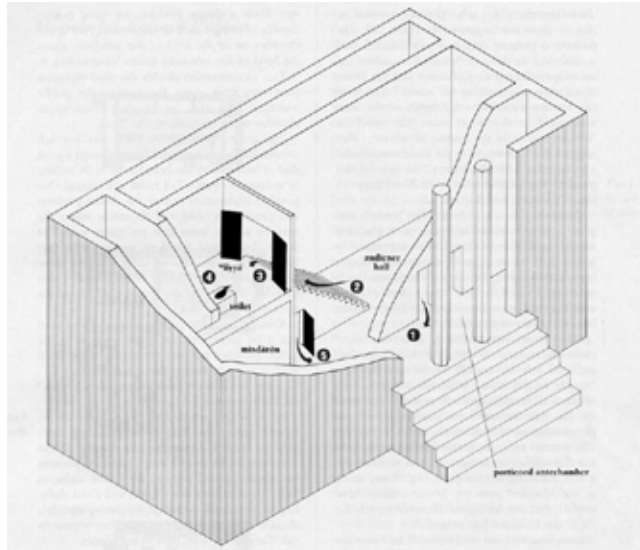
— Bruch Halpern によるエグロン殺害現場復元の場合 —

Halpern はスカトロジカルな解釈に基づいて、エフドによるエグロン殺害現場の具体的な復元を試みている。すでに述べたように、彼は **מִסְדֵּרוֹן** を「隠された場所」と解し、エフドがエグロンを殺害した後、トイレから階下の「隠された場所」へと出て、逃げたと主張する。Halpern は、エフドがエグロンの部屋の扉から出て行かなかった理由を23節 b に見る。

(23節 b) **וַיִּסְגֹּר הַלְּחֹת הָעֲלִיָּה בְּעָדוֹ וַיָּנַעַל**

ここで **בְּעָדוֹ**（前置詞 **בְּעַד** + 3人称男性単数の人称接尾辞）という表現が使われている。Halpern はここから、エフドは内側から部屋の戸に錠を下ろしたと解釈する。鈴木木も23節を、「そこからエフドは……、屋上の部屋の〔入り口にある〕両扉には〔内側から〕門をかけて閉めておいた」と訳し、「内側から門をかけるので、密室となる屋上の部屋からの出口を考えるべきか」と説明している⁴⁵。ちなみに、『新共同訳』の23節では「エフドは廊下に出たが、……部屋の戸は閉じて錠をおろしておいた」となっている。読者の混乱を避けるため、**בְּעָדוֹ** を訳さなかったのだろうか。つまり、Halpern の解釈において、エフドはエグロンを殺した後、殺害現場であるエグロンの

部屋の戸に内側から錠を下ろし、部屋の中のトイレ（の穴）から人の目にふれない「隠された場所」へと出たというわけである。また、エグロンの部屋の錠が内側から下ろされていることから、エグロン殺害は従臣にとってまさに密室殺人事件となる⁴⁶。Halpern は、宮殿の基本的構造としてビト・ヒラニ式宮殿（既述）を土台に、具体的な殺害現場の復元図を提示しているのので、以下に紹介する。



- ①従臣、席をはずす。
- ②エフド、階段を上がり、王に近づく。
- ③王エグロンの部屋に入り殺害。
- ④部屋の扉に錠を下ろし、トイレから「隠された場所」へ。
- ⑤清掃人の使用する扉から外へ。⁴⁷

この Halpern によるエグロン殺害現場の復元はビト・ヒラニ式宮殿の構造を土台に、主に、エグロンの部屋にトイレがあること、מִסְתָּרִין を「隠された場所」と解釈すること、エグロンは部屋を出る際に内側から錠をおろしたことの3点に基づいている。Halpern の解釈では、エフドがエグロンを殺した後の、驚きの脱出が物語のクライマックスであると言えよう。ちなみに彼は、清掃人の使用する扉から出たエフドが従臣たちによって怪しまれなかったことから、エフドが広間（王座の間）から柱のある玄関へと出たと推測している⁴⁸。

Halpern がエフドによるエグロン殺害現場を復元する上で、最も重要なポイントと思われるのは、エフドが部屋の扉を内側から錠を下ろしたということである。エフドが入ってきた扉から出なかったこと、それに加え、トイレがあることが、מִסְתָּרִין を「隠された場所」と解釈することの根拠となっていると思われるからである。ここで

改めて、בַּעַד の意味を再検討したい。

(1) בַּעַד について

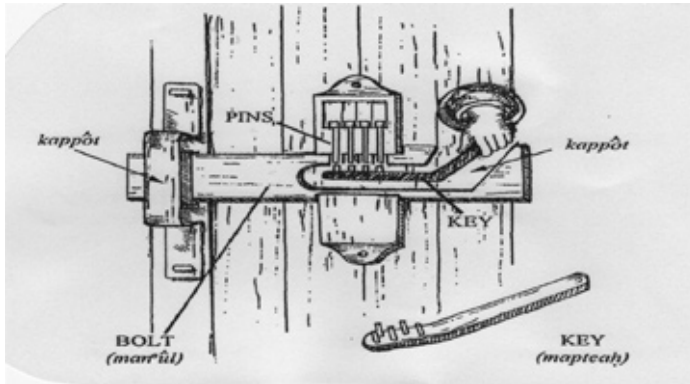
בַּעַד という表現から、エフドが内側から扉に錠を下ろしたと本当に言えるのだろうか。動詞 סָגַר (qal: “to shut”)⁴⁹ は目的語の הֶלֶת (「扉」) と前置詞 בַּעַד と共にヘブライ語聖書では4箇所に出てくる（士師記3章23節を除き）⁵⁰。

(列王記下4章4節)	וּבָאָת וְסָגְרָת הַדְּלָת בְּעַדְךָ וּבְעַד־בְּנִיךָ
(列王記下4章5節)	וַתִּלְךְ מֵאֵתוֹ וַתִּסְגֵר הַדְּלָת בְּעַדָּהּ וּבְעַד בְּנֵיהָ
(列王記下4章33節)	וַיָּבֵא סָגַר הַדְּלָת בְּעַד שְׁנֵיהֶם
(イザヤ書26章20節)	בֹּא בְחַדְרֶיךָ וּסְגֵר (דְּלָתֶיךָ) [דְּלָתְךָ] בְּעַדְךָ

これら4箇所において בַּעַד と関係する人間は扉の内にいる。それゆえ、士師記3章23節 b でもエフドが部屋の内側で錠を下ろしたと推測できる。だからこそ、Halpern はエフドが入ってきた扉ではなく他から出て行ったと考えたのである。しかしながら、士師記3章23節と他の4箇所とは大きな相違点がある。後者では外から内へと移動し、扉に錠を下ろすのに対し、前者では錠を下ろす前に、外へと出たとの記述 (וַיֵּצֵא אֶהֱרֹד הַמְּסַדְרוֹנָה) があることである。この場合、בַּעַד は “behind him” と解することが可能であろう⁵¹。つまり、エフドはエグロンを殺害した後、入ってきた扉から出たということである。しかしここで、エフドは一体どうやって錠を下ろしたかが問題となる。エフドがエグロンの死体から鍵を取り、それで錠を下ろしたのだろうか。もしそうだとするなら、物語のナレーターはひじょうに重要な情報を提供し忘れたことになる⁵²。ただし、この物語を読む・聞くことを想定されていた人々がこの物語に出てくる錠をよく知っていたとするなら、錠についてわざわざ説明することはないのである。テキストから、扉に錠がついていたことは明らかである。それでは、その錠とは一体どのようなものであったのだろうか。

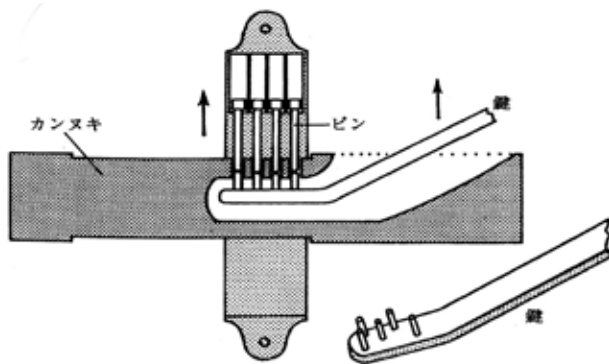
(2) 錠

エフド物語の錠に関して、Philip J. King と Lawrence E. Stager はタンブラー錠（エジプト式錠）を提案している⁵³。



54

このタンブラー錠の仕組みをもっと簡単に示すと次のようになる。



55

エグロンの部屋の扉の錠をタンブラー錠と仮定すると、エフドはエグロンを殺害した後、扉を出て、外から鍵穴に手を入れ、カンヌキ (bolt) をすべらせ、それによってピンが下り、錠がかかったということになる。そして後に、従臣たちが鍵 (מפתח) で扉を開いたのである (25節)。鍵は大きな歯ブラシのような形であり、ヘブライ語聖書の中のイザヤ書22章22節には「私は彼の肩に、ダビデの家の鍵を置く」(新共同訳) とある⁵⁶。

ピーター・ジェームズとニック・ソープはタンブラー錠について次のように説明している。

心棒 (ピンのこと) の入ったタンブラーがついている錠は、イラクで発明されたようである。そこでは知られたかぎりでの最初の例が、アッシリア王サルゴン二世 (在位紀元前七二一～紀元前七〇五年) の建てたコルサバード宮殿の廃墟で発見

された。⁵⁷

エフド物語の舞台は士師記の時代であるから、サルゴン2世の時代よりもはるか前である。もちろん、物語が士師記の時代を正確に反映したものであるかどうかはわからない。しかし、エフド物語から扉は内から錠をかけられ、外から鍵で開けることができることから、タンブラー錠のような構造をもった錠が物語の中では前提とされていたと考えることは可能である。

さらにここで、雅歌5章4-6節に言及することも意味があるだろう。

4恋しい人は透き間から手を差し伸べ
わたしの胸は高鳴りました。
5恋しい人に戸を開こうと起き上がりました。
わたしの両手はミルラを滴らせ
ミルラの滴は指から取っ手にこぼれ落ちました。
6戸を開いたときには、恋しい人は去った後でした……。⁵⁸（『新共同訳』）

ここで4節の「透き間」というのは「穴」であり、5節の「取っ手」とは「かんぬきの取っ手」である。恋しい人が「(鍵) 穴」から手を入れ、戸の錠をなんとかはずそうとしている姿を想像することができる。もちろんここではさらに、性的な意味合いが重ね合わされている。

以上の解釈から、エフドは入ってきた扉からまた出ていったと考えることも可能である。従臣たちはエフドを怪しまなかったのか。そうしたことがないように、エフドは最初、貢ぎ物を納めるためだけにエグロンと出会い、モアブ側を油断させたのである。

IV. 結び

結局のところ、エフドによるエグロン殺害現場が十分に解明されたとは言えない。そもそもテキスト内外に十分なデータがない以上、こうしたことは最初から予想されていることではある。むしろ、十分なデータがないからこそ、研究者は意味の解明に向けて、少ないデータをいろいろな角度から検討するわけである（データが少ないからこそ、様々な解釈の可能性が生まれ、そこに解釈の面白さがある）。そのひとつが本論で紹介した、スカトロジカルな観点である。

スカトロジカルな解釈の出発点は、テキスト内に明示されている24節の「(従臣た

ちが) 王は涼しいところで用を足しておられるのだと言いつつ」(『新共同訳』)にある。22節 b の הַפֶּרֶשְׁתָּהּ を「糞、汚物」と結び付ける解釈にも24節は少なからぬ影響を及ぼしてはいたはずである。さらに、スカトロジカルな解釈を展開させたのが、23節 a の הַמִּסְדְּרוֹנָה に関する Halpern の解釈であり、それに、עֲלִיַּת הַמְּקָרָה と חֲרָר הַמְּקָרָה についての Jull の解釈が続く。スカトロジカルな要素をエフド物語に認めることにより、エフド物語が単なる英雄物語ではなく、かなりユーモラスな物語に変化することになる。すでに明らかにしたように、スカトロジカルな解釈は十分に説得力があるというわけではないが、まったく的を外れの解釈として退けるわけにもいかない。なぜなら、エフド物語には他にもユーモラスと思われる要素⁵⁹が見つけ出されるからである。例えば、22節の「剣は刃からつかまでも刺さり、抜かずにおいたため脂肪が刃を閉じ込めてしまった」(『新共同訳』)という箇所。エフドは凶器を最も見つかりにくい、殺害されたエグロンの体内に残したのである。こうした、事実としては受け入れがたいところにユーモアの要素が現れ出てくる。そして、この前提となる、17節の「王は非常に太っていた」という表現もユーモラスなものである。加えて、エグロンという名前は「若い牡牛、肥えた牛」といった意味を持ち⁶⁰、肥えた王自身が犠牲となったのである。ここにはユーモアというよりも、皮肉の要素を見るべきなのかもしれない。ちなみに、Marc Z. Brettler はエフド物語を風刺文学 (satire) と見なしている⁶¹。こうした聖書のテキストにユーモア (あるいは皮肉・風刺) の要素を見つけ出そうとする傾向は、テキストそれ自体の問題というよりも、むしろ解釈者の読み方が変化してきたことを改めて気付かせてくれるのである。

注

- 1 「屋上にある (彼専用の) 涼しい部屋」(20節)、「涼しい部屋」(24節) (フランシスコ会聖書研究所『聖書 原文校訂による口語訳 士師記 ルツ記』中央出版社、1993年、30-31頁)。「涼しい屋上の部屋」(20節)、「奥の涼しい小部屋」(24節) (鈴木佳秀『旧約聖書 IV ヨシュア記 士師記』岩波書店、1998年、116-117頁)。「涼しい屋上の部屋」(20節)、「涼み部屋」(24節) (『新改訳 聖書』第3版、日本聖書刊行会、2004年)。「(his) cool roof chamber」(20節)、「the cool chamber」(24節) (*New Revised Standard Version* = NRSV)。「(his) cool upper chamber」(20節)、「the cool chamber」(24節) (*JPS Hebrew-English TANAKH* = TNK)。
- 2 Ludwig Koehler and Walter Baumgartner, *The Hebrew & Aramaic Lexicon of the Old Testament* (= *HALOT*), Volume 1 (1994), p. 293参照。
- 3 名尾耕作『旧約聖書 ヘブル語大辞典 改訂2版』聖文社、1984年、1059頁。
- 4 *HALOT*, Volume 2 (1995), p. 832参照。
- 5 申命記34章3節参照。

- 6 Tom A. Jull, “מִקְרָה in Judges 3: A Scatological Reading,” *JSOT* 81 (1998), p. 64. 気温に関するデータは、*Atlas of Israel: Cartography: Physical and Human Geography* (New York: Macmillan, 1981), § 4.1による。
- 7 池田裕「士師記」、高橋虔・B. シュナイダー監修『新共同訳 旧約聖書注解 I 創世記－エステル記』日本基督教団出版局、1996年、439頁。この指摘はあくまで『新共同訳』の表現を前提としたものである。
- 8 *HALOT*, Volume 3 (1996), p. 1149参照。
- 9 *HALOT*, Volume 3, p. 1138参照。
- 10 Lawrence E. Stager, “The Archaeology of the Family in Ancient Israel,” *BASOR* 260 (1985), p. 16. この見解は最初、M. Garsiel によって提案された。M. Garsiel, “The Ehud ben-Gera Episode (Judg. 3:12-30),” *Sepher Ron* (Tel Aviv: Don, 1974), pp. 61-62.
- 11 *HALOT*, Volume 2, p. 629参照。「屋根の梁」（名尾『ヘブル語大辞典』、886頁）。
- 12 Stager, “The Archaeology of the Family,” p. 16.
- 13 *HALOT*, Volume 3, p. 1091参照。
- 14 Baruch Halpern, *The First Historians: The Hebrew Bible and History* (University Park, Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press, 1988), pp. 45-46; “The Assassination of Eglon: The First Locked-Room Murder Mystery,” *Bible Review* IV/6 (1988), p. 38.
- 15 Israel Finkelstein and Neil Asher Silberman, *The Bible Unearthed: Archaeology's New Vision of Ancient Israel and the Origin of Its Sacred Texts* (New York: The Free Press, 2001), p. 140.
- 16 Eric M. Meyers (editor in chief), *The Oxford Encyclopedia of Archaeology in the Near East: Prepared under the Auspices of the American Schools of Oriental Research*, vol. 4 (New York: Oxford University Press, 1997), p. 199; アミハイ・マザール（杉本智俊・牧野久美訳）『聖書の世界の考古学』リトン、2003年、245頁（Amihai Mazar, *Archaeology of the Land of the Bible, 10,000-586 B.C.E.* [New York: Doubleday, 1990], p. 379）。
- 17 「北の宮殿（6000番宮殿）は、北シリアのビト・ヒラニ式宮殿のプラン、特に南トルコのジンジルリのものと似ている。南の宮殿（1723番宮殿）もビト・ヒラニ式宮殿の変形だと考えられるが、より複雑なプランとなっている」（マザール『聖書の世界の考古学』、249頁）。
- 18 マザール『聖書の世界の考古学』、247頁。
- 19 *HALOT*, Volume 3, pp. 1137-1138参照。
- 20 Jull, “מִקְרָה in Judges 3,” p. 65.
- 21 Jull, “מִקְרָה in Judges 3,” p. 68.
- 22 Jull, “מִקְרָה in Judges 3,” p. 65.
- 23 Jull, “מִקְרָה in Judges 3,” p. 68-69参照。
- 24 22節にはもうひとつの *hapax legomenon* である נֶבֶךְ があるが、意味は「(剣の) 柄」（名尾『ヘブル

- 語大辞典』、975頁) であることは明らかである。
- 25 名尾『ヘブル語大辞典』、1133頁。
- 26 K. Budde, *Das Buch der Richter* (Leipzig: Mohr, 1897), p. 31; George F. Moore, *A Critical and Exegetical Commentary on Judges* (Edinburgh: Clark, 1895), p. 97; H. N. Rösel, “Zur Ehud-Erzählung,” *ZAW* 98 (1977), p. 272.
- 27 TNK は “and the filth came out” と訳している。
- 28 J. Alberto Soggin, *Judges: A Commentary*, The Old Testament Library (Philadelphia: Westminster Press, 1981), p. 52.
- 29 Robert Alter, *The Art of Biblical Narrative* (New York: Basic Books, 1981), p. 39による。
- 30 Robert B. Chisholm, Jr., *From Exegesis to Exposition: A Practical Guide to Using Biblical Hebrew* (Grand Rapids, MI: Baker Books, 1998), p. 195。
- 31 Chisholm, Jr., *From Exegesis to Exposition*, p. 195。
- 32 L. Köhler and W. Baumgartner, *Lexicon in Veteris Testamenti Libros* (Leiden: E. J. Brill, 1953), p. 783. *HALOT*, Volume 3, p. 978参照。
- 33 Michael L. Barré, “The Meaning of *pršdn* in Judges iii 22,” *VT* XLI/1 (1991), p. 2.
- 34 Barré, “The Meaning of *pršdn*,” pp. 2-4.
- 35 Barré, “The Meaning of *pršdn*,” p. 4.
- 36 Barré, “The Meaning of *pršdn*,” pp. 4-6参照。
- 37 Barré, “The Meaning of *pršdn*,” p. 11. Baruch Halpern は, “and out ‘it’ came at the anus” と英訳している (“The Assassination of Eglon,” p. 34)。主語が明示されていないのは婉曲的であるとされる。
- 38 Barré, “The Meaning of *pršdn*,” pp. 10-11.
- 39 ハンス・ヴィルヘルム・ヘルツベルクは次のように述べている。「二二節のパルシェドーンは、意味のはっきりしない言葉だが、おそらくアッシリア語の *paraschdinu* 『穴』と関連すると思われ、ヘブライ語のペレシュからは『糞』が示唆される。ミスデローンという語は、p の代わりに m となっている点を除けば、子音が大体同じなので、二三節の最初の三つの語は、二二節の終わりの二つの語の異文による読みであるように思われる。ミスデローンは建築技術に関する概念かもしれない(王上六の九、セデーラー [梁] 参照) ([小友聡他訳]『ヨシュア記・士師記・ルツ記：私訳と註解』ATD・NTD 聖書註解刊行会、2000年、341頁)。
- 40 Barré, “The Meaning of *pršdn*,” p. 10.
- 41 名尾『ヘブル語大辞典』、1003頁。
- 42 Halpern, *The First Historians*, p. 58. 鈴木『ヨシュア記 士師記』、116-7頁。
- 43 Baruch Halpern, *The First Historians*, p. 58; “The Assassination of Eglon,” p. 40. この解釈は元々は David Golomb によるものとのこと。筆者は Golomb の論文(の存在)を確認できなかった。また、Halpern はペルシア時代のビプロスからの Yehawmilk 碑文にある並行箇所 (*mistārîm*) を指摘してい

- る (*The First Historians*, p. 58)。
- 44 Halpern, *The First Historians*, p. 58; “The Assassination of Eglon,” p. 40.
- 45 鈴木『ヨシユア記 士師記』、116頁。
- 46 Halpern は、注14にある論文の副題を「最初（世界最古）の密室殺人事件」(*The First Locked-Room Murder Mystery*) としている。
- 47 Halpern, “The Assassination of Eglon,” p. 37. 予想平面図に関しては、*The First Historians*, p. 53参照。ビト・ヒラニ式宮殿に関する Halpern の見解については、*The First Historians*, pp. 46-54と “The Assassination of Eglon,” p. 39参照。
- 48 Halpern, “The Assassination of Eglon,” p. 37.
- 49 *HALOT*, Volume 2, pp. 742-743参照。
- 50 動詞 סָגַר (“to shut, close”) が目的語の「扉」を持たずに、前置詞 בְּעַד と共に出てくるのは、次の4箇所である。וַיִּסְגֹּר יְהוָה בְּעַדוֹ (創世記7章16節)、וַיִּסְגֹּר הַחֲלָב בְּעַד הַלֶּחֶב (士師記3章22節)、וַיִּסְגְּרוּ בְּעַדָם (士師記9章51節)、כִּי־סָגַר יְהוָה בְּעַד רַחֲמָיו (サムエル記上1章6節)。
- 51 Chisholm, *From Exegesis to Exposition*, pp. 196-197.
- 52 Halpern, “The Assassination of Eglon,” p. 36.
- 53 Philip J. King and Lawrence E. Stager, *Life in Biblical Israel* (Louisville, KY: Westminster John Know Press, 2001), pp. 32-33.
- 54 King and Stager, *Life in Biblical Israel*, p. 33. 図は Vincent J. M. Eras, *Locks and Keys throughout the Ages* (New York: Lips' Safe and Lock Manufacturing Co., 1957) から。
- 55 ピーター・ジェームズ、ニック・ソープ (矢島文夫監訳)『事典 古代の発明』、東洋書林、2005年、388頁。
- 56 King and Stager, *Life in Biblical Israel*, p. 31.
- 57 ジェームズ、ソープ『事典 古代の発明』、388頁。ちなみに、預言者イザヤはサルゴン2世と同時代である。
- 58 King and Stager, *Life in Biblical Israel*, p. 31.
- 59 何をユーモラスと感じるかは人によって違う。時代や地域が異なればさらに違うはずである。だからここでは、「ユーモラスと思われる」という表現にしている。
- 60 鈴木『ヨシユア記 士師記』114頁。ちなみにエフドは「一匹狼、単独者」の意味 (115頁)。
- 61 Marc Zvi Brettler, “The Ehud Story as Satire,” *The Creation of History in Ancient Israel* (London and New York: Routledge, 1998), pp. 79-90参照。

